

# 創造都市における共生社会の戦略的課題

大阪市立大学創造都市研究科教授 野口道彦

『部落問題のパラダイム転換』(2000年、明石書店)など、部落問題に関心をもって研究し、最近は、バングラデシの清掃労働者をめぐるカースト、マイノリティ関係の共同研究を行っている。

## 1. 創造都市とは何か？

「創造都市とは何ですか、創造都市と共生社会との関係は、どのようなものですか」という質問を、研究科が発足して間もないころ一期生から受けた。正直に告白すれば、あまり深くは考えてこなかった。創造都市研究科の「創造都市」というのは、3専攻8分野を包み込む風呂敷か、それぞれをつなぐ接着剤か、あるいはサラダにかけるドレッシングのようなものぐらいに考えていた。

風呂敷というのは、いろいろなものを包み込む機能をもつものであるが、包装紙は、中身を立派にみせる役割をもっている。「創造都市」という看板が、包装紙であるならば、少しさびしすぎる。接着剤というのは、異質なものを、バラバラになったものを、つなぎとめる役割がある。接着する力は、強ければ強いほどよいと錯覚しがちであるが、ポストイットのような接着力がよわく剥がしやすいのも重宝される。こう考えると、いちがいにはいえない。一般には、接着剤自体は目立たないほうがよいとされる。白いボンドがつなぎ目からはみ出ているようでは、興ざめである。「創造都市」というのは、かなり目立つ存在だから、裏方に徹した接着剤でもなさそうである。

「創造都市」という看板が、風呂敷でも、包装紙でもなく、接着材でもないとすると、何だろうか。創造都市という言葉は、かなり魅惑的なものである。人に期待をもたせるような響きがある。可能性を秘めた概念である。

創造都市の前には、好きな単語をもってきて、いろいろなビジョンを描くことができる。産業創造都市、環境創造都市、文化創造都市、生活創造都市、芸術創造都市、ロボテック創造都市、自治創造都市、福祉創造都市、健康創

造都市、ゆとり創造都市、個性創造都市、感動創造都市.....など。都市のもつ創造性機能に注目すれば、〇〇を創造する都市という調子で、いくらでも造語できる。そのように創造都市という言葉は、広がりをもっている。融通無碍であり、悪くいえば無定型である。無定型にとどめておかなければ、風呂敷か包装紙の役割にとどまることになる。

「大風呂敷としての創造都市」、「包装紙としての創造都市」、「接着剤としての創造都市」をしりぞけるとすると、もう少し明確な概念規定が必要である。その出発点として、佐々木雅幸による定義を参照してみよう。「創造都市とは人間の創造的活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な市場経済システムを備えた都市である」がそれである。この定義の前半は、「創造都市」という言葉が喚起させるイメージである。ただ、細かいことをいうならば、「文化と産業における創造性」のところで、なぜ文化と産業の二つだけが取り上げているのか、それ以外にも重要なものがあるのではないか、という疑問がわかないでもない。とはいえ、大筋において共通認識としてほぼ合意できる部分であろう。一方、後半部分で、佐々木さんは「大量生産」に批判的な視点を込めている。このことが示唆するように、創造都市といった場合、どのような社会に導いていくのか、それを明確にしようということになると牧歌的なサロンにたちまち暗雲がたちこめる。ポスト・フォードイズム、反グローバリズム、ポスト・コロニアニズムなど、主流となっているシステムや価値観に異議を申し立てる対抗的な理念を設定するのか、しな

いのか、これを論点にするならば、意見の対立も生じ、満場一致で賛成とは、いかなくなる。

## 2.創造都市論のエートス

チャールズ・ランドリーは、対抗的な理念を設定することにはあまり熱心ではない。慎重に避けているのかもしれない。プロセスを重視している。めざすべき都市像への合意から出発するのではなく、創造的な営みに力点をおいている。

創造的都市とは何かが演繹的に語られるのではなく、都市創造のエートスとして語られている。創造性を奪っているものは、ランドリーによれば、専門分野の硬い枠組みであり、組織的ないしは官僚的メンタリティである。

重要なのは、かたちや道具ではなく、それをつかいこなすエートスである。偏見のない方法で物事を考える、機知に富んだ問題解決能力、知的なリスクをとる気質、問題への新しく実験的なアプローチ、反省することができる能力、創造や再創造を導く学習のサイクルをつくりだす能力、既存の価値観からの自由、絶えざるイノベーション、官僚主義(硬直的な慣例化)に対する批判、市民主義、急進派・草の根運動への期待、ハードウェア的解決からソフトフェア的解決へ、連携と協働性による活性化等々、共有されるべきものは、これらのエートスである。

## 3.創造都市は、どこに向かうのか

柔軟な発想で企画し、失敗を恐れずに絶えず挑戦していく、一種の永続革命を志向しているとも言える。とはいえ、どこに向かって進んでいくのだろうか。才能をもった個人が、その能力を自由に発揮し、その果実を満喫できる社会だとしても、万人が万人に闘うホップスの社会では困る。

ランドリーの創造都市論の中では、「社会的排除」への批判的視点や「持続的可能性」が極めて重要なキーワードとなっている。これらの視点は、弱肉強食的な市場競争な社会に向かうことへのブレーキ役となっている。いやブレーキという消極的な役割にととまらず、それこそ

創造都市の質を問うものとして設定されている。

チャールズ・ランドリーは、「社会的排除に対処することは、都市の創造的活動にとって、緊急の必要である」と明言する。社会的排除(social exclusion)の問題は、刺身のつまのような位置づけではない。根幹をなすものである。

ランドリーの社会的排除についての考え方は、デモス研究所のPerri 6のレポート「社会的排除:楽観的に考えるべき時代」に依拠している。それによると、「社会的排除とは、現代社会が提供している最も重要な生活機会、それによって当該社会のメインストリームの生活に結びつける生活機会へのアクセスの機会が奪われている人である」と定義している。

社会的排除という表現は、イギリスやフランスで最近よく使われるようになったが、アメリカでは「不利な条件に置かれた人々(social disadvantaged)」という言葉がつかわれる。その違いについては、ここでは触れないが、どちらも社会的差別を受けてきたマイノリティの存在が大きい。単に経済階層的にみて貧困であるという意味ではない。世代を越え長年にわたって不利な状態におかれ、社会構造的に不利な状態から抜け出すことができない人たちを意味する。

創造都市づくりは、これらの社会的に排除された人々を包摂してゆくものでなくてはいけない。そうになると、問われるのは、包摂(inclusion)の中身である。恩恵的・同情的な包摂、保護の客体として考慮されるのではなく、社会的に排除された人々が創造都市の主体として登場しなければならない。スラム地域の再開発では、プランづくりにスラムの住民が参加し、意思決定に加わる必要がある。野宿者問題の解決のためのさまざまなプランづくりには、野宿者自身が参加する必要がある。

しかし、これはなまやさしいことではない。もともと、社会的に排除された人々は、意思決定のプロセスから排除されているし、情報へのアクセスやコミュニケーションの手段にも大きな制限をうけている。さらに、意欲すら持たないことも、他者への不信感をもたされているこ

ともある。このような状況をそのままにしておいて、「街づくりに参加してください。一緒にやりましょう」と声をかけるだけでは欺瞞的だ。さまざまなハンディーを克服する手段やしきみづくりを創意・工夫し、つくりだしていかなければならない。そのことが、創造都市へのプロセスである。

従来のシステムが社会的排除を温存してきたという視点に立てば、大胆に現在のしきみの手直しを図ることが不可欠である。その場合には、既得権益とぶつかることもあるから、予定調和的に全員の賛成を得ることは望めない。現行のシステムを正当化する論理や勢力との闘争も避けがたい。

#### 4.創造都市と持続可能性

ランドリーの創造都市論で、もう一つ重要なキー概念は、持続可能性である。「持続可能性は、われわれの時代の中心概念である。それは、われわれが世界を解釈する新しいレンズである。われわれに残された遺産の効果を考えなければならないし、世代間公正の問題にも踏み込まなければならない。」

持続可能性はエコロジカルな視点から考えられることが多い。限りある資源をわれわれの時代で消費しつくしてしまわないために、また核汚染物質をはじめ、有害な廃棄物の処理というやっかいな問題を、次世代にもちこさないために、持続可能なシステムづくりは、喫緊な課題である。

エコロジカルな持続可能性だけではなく、ランドリーは、社会的な持続可能性、政治的な持続可能性、文化的な持続可能性、感情的な持続可能性、教育の持続可能性を含めた多元的なものを考えている。

こうした持続可能性についての概念の内実は、まだ十分に詰められてはいない。社会的持続可能性と、社会的排除や社会的不平等との関係も緻密に考える必要がある。私は、ランドリーの考え方には、イギリスの社会状況に対するある種のスタンスがあるように思える。映画監督ケン・ローチが描いている世界、たとえば鉄道保線作業員

を描いた『ナビゲータ』、ビル清掃労働者を描いた『パンとバラ』、リバプールの港湾労働者闘争を描いた『ピケを越えなかった男たち』と通底するところがあるように私には思える。会社の上層部の断行した合理化策が、労働者の分断と生活の破壊を生み出していく。それに対する批判的視点である。

#### 5.共生社会の創造をめざして

私は、創造都市を考えるときは、共生の問題を抜きにしては考えられないと思う。社会的包摂概念よりも、共生概念を重視すべきだろう。もちろん社会的包摂のとらえ方も論者によって異なるが、社会的包摂は、同化(アシミレーション)を含み込んでいる。つまり、同化主義的包摂もある。他方、八木晃介が指摘するように、包摂は排除と必ずともなっている。「公然と包摂されていないものは排除されている」とすると、社会的包摂も一筋縄でいかない。

このような排除と包摂とが織りなす緊張関係を自覚的にとらえるには、共生概念の方がよい。同化に対する批判的視点があるからだ。

これまで、私は、わかりやすく共生概念には、甘口の概念と辛口の概念があると語ってきた。最近、もてはやされるのは「たがいの違い認め合いながら、お互いを必要とし、理解しようとするポジティブな関係」といったような甘口の概念である。しかし、「差異の承認」を求めた途端、予定調和的に四方八方がうまく収まらなくなる。だからといって、「差異の承認」を認めるなどというのではない。「資源や機会の平等な配分」要求にしても矛盾や対立は不可避的である。そうした対立や矛盾を自覚的にとらえたうえで、なおかつ共生をいかに考えるのか。それによって、辛口度数が変わる。

状況の認識の共有すら容易でない。一般にマジョリティは現状肯定的になり、できるだけ対立が激化しない方向で発想し、行動することが多い。一方、マイノリティは、現状に対して批判的で、不利な状態を少しでも変えようとする。だから、現状の対立や矛盾についての認識のし

かた自体が、マジョリティとマイノリティとでは、かなり違ってくる。マジョリティは甘口の共生観をもち、マイノリティは辛口の共生観をもつ傾向にある。マイノリティ内部も、多様なサブ・グループに分かれているのが通例であるから、マイノリティといえども、一枚岩ではない。それぞれの位置関係によって、共生へのスタンスが変わってくる。

共生を考える時、同化を強要されないかどうか、力関係における対等性が志向されているか、機会の平等性、社会的資源への平等なアクセスがどの程度現実化されているのか、などが点検軸として設定されるだろう。

「差異の承認」か「資源の再配分」か、どちらを優先するのかをめぐっても、マイノリティ内部でも意見の対立があるだろう。だが、機会が不平等で社会的資源へのアクセスが制限されているとすると、いくら「差異の承認」を語っても、隔離(セグレゲーション)を正当化に手を貸すことになってしまう。逆に、同化を条件に社会的資源への平等なアクセスを認めるのなら、まさに人間としての尊厳を冒すことになる。「差異の承認」か「資源の再配分」のいずれをとるのかという二者択一の問題ではない。

包摂が他方では排除を生んでいるように、共生は達成されていると言った瞬間に、他者への抑圧を隠蔽することになる。共生社会は、それに向かうプロセスとして考えるべきもので、平等の根柢の根源的な問い直しを内包するダイナミックな可能性としてとらえるべきだろう。

その共生社会の実現は、創造的なエートスが必要である。創造都市をめざす営みは同時に共生社会をめざす営みでなければならない。

#### 【参考文献】

- ナンシ・フレイザー『中断された正義』、1997年  
(仲正昌樹監訳、お茶の水書房、2003年)
- チャールズ・ランドリー『創造的都市』2000年  
(後藤和子監訳、日本評論社、2003年)
- 野口道彦、柏木宏編『共生社会の創造とNPO』、2003年  
(明石書店)
- Perri6, " Social exclusion: Time to be optimistic "  
1997, Demos Collection 12,  
<http://www.demos.co.uk/>
- 佐々木雅幸『創造都市の経済学』1997年(勁草書房)
- 佐々木雅幸『創造都市への挑戦』2001年(岩波書店)
- 八木晃介『「排除と包摂」の社会学的研究』2000年  
(批評社)

組織労働者は、既得の権利を守ろうとするときは保守的になる。マイノリティが未組織労働者であるときは、マイノリティとの対立が生じる。だから組織労働者は、マジョリティ側に位置すると考えて方がよい場合もある。別の文脈では、マジョリティ、マイノリティ、組織労働者の三者関係でみた方がよい場合もある。マイノリティと組織労働者、未組織労働者との関係は複雑である。